
告白

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白

【Nコード】

N1370J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

太郎は、今日、告白しようと思っている。告白なんて、初めてのことで、緊張すること限りなし。でも。勇気を出して――。文学寄りの青春短編小説。

今日、告白しようと、太郎は思っていた。

何しろ、告白など初めてのことで、周りの人にはまだ誰にも相談していない。このまま誰にも打ち明けないまま、太郎は実行しようと思っている。

太郎は、学生服に着替えながら、鏡の中の自分のヘアスタイルを真剣な目でチェックしている。

そして、よし、とつぶやくと、鏡の中に映った太郎の顔は、ほほえんだ。

「太郎、早くしないと遅刻するわよ」

ドア越しに、母の和江が言う。真面目な声で、よく通った声だった。

「わかってるよ」

そう言って、太郎は鞆を持ってドアを開けた。

ドアの前に和江がいて、太郎を見ると、一つうなずいた。そのまま階段を下りる和江に続いて、太郎も下りる。

「太郎、今日なんだか嬉しそうじゃない？」

「そう？」

太郎は笑みを和江に向けた。和江はほほえみながら太郎の顔を見て、そして、玄関の床に置いてあった自分の鞆を取ると、靴をはいた。太郎も、同じように和江の隣で靴をはく。

そして、二人は連れ立って外へ出た。よく晴れ割った空から、なかなか強く暑い日差しが下りてきて、太郎は太陽の方向へ体を向けながら、和江が鍵を閉め終えるのを待った。

「じゃ、太郎。行ってくるからね」

「ああ。気をつけてね」

太郎は門の前で和江と別れ、和江の向かう方向とは反対の方向へ歩き出した。

太郎の通う中学校は、徒歩二分の距離にあり、住宅街を抜けて、大通りに出たところに学校はあった。

太郎は学校の正門を、背筋をぴんと伸ばし、どこか優等生を思わせるような凜とした歩き方で、くぐり抜けた。

登校する生徒が一番多い時間帯で、太郎の周りには、多くの生徒が歩いていた。

太郎はそのまま玄関に入り、下駄箱で上履きに履き替えた。その時、同じクラスの女子生徒が、太郎の横で、靴をはきかえた。

「塩崎君、おはよ」

その女子生徒は上履きをしまいながら、軽く太郎の方へ振り向き、笑顔で言った。

「おはよう」

太郎も穏やかな笑みを返して、そのまま教室へと向かう。

教室に着くと、すでにもう生徒の声でにぎわっており、太郎は一番後ろの、窓側席へと近づくと、座った。

「よう、太郎」

それまで他の仲間と話しこんでいた背の高い男子生徒が、太郎の席へと近づいてきた。すると、その生徒と話していた仲間も、席を離れて、太郎の元へと歩み寄ってくる。

「太郎、今日こそは告白するのか？」

突然、背の高い生徒——鈴木に告げられて、太郎は鞆を机の上にとん、と置いたまま、体の動きを止めた。

その様子を見て、鈴木は笑いながら太郎の返答を待つ。

「まあ——」

太郎はそれだけつぶやいて、鞆の中から教科書を取り出して、机の中にしまう。

「まあ、なんなんだよ？」

「まあ、それなりに」

「それなりにもう覚悟は決めましたか？」

鈴木と話し込んでいた他の仲間が鈴木の周りに立って、太郎を見

つめる。

「まあ、それなりにはね」

そう言って、太郎は笑みを浮かべた。

すると、鈴木を含めた数人が、おお〜、と声を上げる。

「で、誰なの？ …… といっても、別に教えてくれなくても良いけどね。終わった後で、気が向いたらこっそりと教えてくれればいい」
「ラジャー」

そう言った時、黒板近くの教室の入り口から、三名の女子生徒が入ってきた。

その時、太郎はその三人の一番最後尾に歩くその女子生徒を直視した。

ポニーテールの髪を、薄茶色に染めていて、女子の中では少し背の高い体格をした女子生徒だった。ワイシャツの上に、クリーム色のセーターを着て、スカートを短くしていた。

太郎はしばらく、その女子生徒を真剣な目でじっと見つめた。その時ふと、その女子生徒が、自分の席へ向かう途中、太郎の方を見た。しかしすぐに、気にしていないように、視線は素通りし、彼女は廊下側の一席に腰を下ろした。

太郎はすると視線を外して、机の上に目を落とした。

「太郎が好きなやつて」

突然、上から声が上がって、太郎が顔を上げると、鈴木が笑いながら、見下ろしていた。

「まあ、いいや。がんばれ、太郎」

そう言って、鈴木はぼん、と太郎の肩に手を置くと、元いた席に戻って行った。すると、周りにいた生徒もそのあとを追って、太郎の元を離れていく。しかし、二人だけ男子生徒が、太郎の元に残った。

その二人の生徒と、ゲームの話をして、時間をつぶしていたら、担任の男性教諭が教室に入ってきて、あわてて二人は自分の席に戻って行った。

太郎は、昼食の時間（その日は授業は半日で、太郎は午後から文芸部の集まりに参加することになっていた）に、ポニーテールの女子生徒——本田和子がまだ帰宅せずに学校に残っているのを確認して、安心していった。

本田和子は、親友の女子生徒と、机を向かい合わせにくっ付けて、一緒に昼食を取ろうとしていた。

太郎は、クラスにわずかな人数の生徒しか残っていないことを確認して、席から立ち上がった。

そして、和子の席に歩み寄った。

そこには、和子はいなかった。和子は今、用事のためか、クラスにはいない。

代わりに、彼女の親友の女子生徒だけが席についており、太郎はその子の元に歩み寄った。

「ちよつと、島崎さん」

そういうと、女子生徒は「はい」と振り向いた。

彼女は、体を後ろにひねるようにして振り返り、太郎を見つめた。

「これさ、本田に渡しておいてくれる？」

太郎は、制服のズボンのポケットから、折ったメモ用紙を取り出し、それを女子生徒に渡した。

すると、女子生徒はまず、差しだされたメモ用紙を見て、そして、次に太郎の顔をじつと見た。

女子生徒は無表情のまま、「わかりました」と言つて、そのメモ用紙を受け取った。青いメモ用紙だった。そして、羅線が引かれていて、そこに文字を載せて書けるようになっていた。

太郎が渡した時、ちよつと和子がまた教室に戻ってきて、太郎の心臓の鼓動は激しく高鳴りだした。太郎は、すぐその場を離れ、教室を出た。

そして、廊下を歩き、階段を下り、一階の売店の横の自販機で、缶を買った。炭酸のグレープフルーツ味のジュースだった。

太郎は、自販機の傍で、缶を開け、それをごくごくと飲んだ。そして、飲み干した缶を、勢いよく、近くの窓の欄干に置いた。まるで、中年の男が酒を一気飲みした時のような素振りだった。

太郎は、欄干に背をつけて、よりかかった。それで、大きくもたれかかるように体を後ろにそらし、向かい側の窓の外に見える中庭の景色を見つめた。

「あー……」

もう心臓の高鳴りはおさまっていた。そして、心にも余裕がある。太郎は、あー、とつぶやきながら中庭の景色をじっと見つめた。

そんな太郎の前を、数人の生徒が太郎をじっと見ながら通り過ぎていく。

太郎はそのまま、売店の周りで油を売って、二十分過ごした。そして、自分の腕時計を見やると、胸の部分を抑えながら、ゆっくりと階段を上りだした。そして、屋上まで上った。

屋上の扉をくぐると、強い日差しが照りつけてきて、太郎は眩しい中、目を細めながら顔を左右に振り向けた。

屋上には、人はいなかった。太郎は歩き出し、ちょうど物陰になっているスペースへと歩いた。

すると、そこに和子と、その親友の女子生徒が二人、立っていた。太郎の心臓が、その鼓動が止まりそうなくらい、大きく、どくんとはねた。

太郎は二人の前に行くと、震える手をブレザーのポケットに差し入れた。

気づかれないように、すう、と大きく息を吸って、太郎は二人を見据えた。

「来てくれてありがとう。手紙、読んでくれてありがとう」

そう言っても、和子は何も言わず、黙って太郎を見つめていた。

そのうち、和子の視線が、ずっと地面の上に落ちた。

「俺さ。本田のことが好きなんだ」

太郎は真剣な目で、彼女に凜とした、はっきりとした声でそう言

った。

すると、下を見ていた和子は、ぎゅっと自分のセーターの裾を握りしめた。

「いいよ」

そう言っで、和子は視線を上げた。

「いい……」

太郎はそう、今言われた言葉を、繰り返した。

和子の隣にいた親友の女子生徒が、和子の方に振り向いてじっと見つめた。

「付きあっても良いよ」

「俺のこと、どう思ってるの？」

「好きだよ」

太郎はそう言われて、頭の中が真っ白になる心地がした。

「ずっと好きだった。私も」

太郎は、自分の心臓が、どくどくと激しく脈打っているのを感じた。

「それじゃあ……いいんだね」

「いい」

「……ありがとう、ホント。ほんとありがとう」

「こちらこそありがとう」

二人は、お互いに軽くお辞儀をし合った。

その二人を交互に見つめて、親友の女子生徒が、微笑ましそうに笑う。

それきり話す言葉がなくて、太郎と和子は、お互いに見つめ合っていた。しかし、すぐにその沈黙がおかしくなつて、太郎と和子はお互いに嘖き出して、笑った。

「……あのさ。さっそくだけど、一緒に帰るってのは、どう？」

太郎は笑いながら、言った。

「いいよ。行こう、早苗」

早苗と呼ばれた女子生徒は、うん、とうなずいてから、おめでと

う、と和子に一言言った。

すると、和子は、一つうなずいて見せ、そして、三人は屋上の入り口へと歩いた。

和子に聞いてみると、今日、午後の予定は何も入っていないと言う。太郎は、うきうきとした気持ちで、和子と話し、教室に向かった。

教室に着くと、数人の生徒が残っていた。そんな中、太郎たちは黙って自分の荷物をまとめ、教室を出た。

三人は、ぽつぽつと会話しながら下駄箱に来て、靴に履き替え、そして駐輪場へと向かった。

駐輪場の、太郎のクラスのスペースに行った。

和子の自転車は、ピンク色の線の入った、銀色のフレームだった。和子は、その自転車を押しながら、歩き出した。

早苗は、午後に習い事があるらしく、先に自転車に乗って帰って行った。

二人は並んで校門を抜けた。

太郎と和子は、一年の時に同じクラスになったことがある。今はやっていないが、その時、太郎は野球部で、グラウンドで練習に励む際、近くのテニスコートに和子がいるのをちらちらと見ていた。

何度か見えているうちに、太郎は彼女の様子を見るのを、無意識に習慣化するようになった。そして、気づいてみれば、たまに練習の合間に彼女と話すようになっていた。

最初に彼女と会話した時は、彼女の方から話してきた。それは、同じクラスで、席が隣になっていたために、彼女が興味を持って太郎に話してきたのだった。

太郎はその時のことをよく覚えている。彼女は白いテニスウェアを着ていて、それがとてもよく似合っていた。その時の彼女は、とても汗をかいていて、彼女の汗の匂いが、太郎の鼻先まで迫っているほどだった。

その時、太郎はとても心臓の鼓動が速くなったことを覚えている。

何しろ、女子とはあまり話することがないために、彼女の方から話してきた時には、とてもびっくりした。

会話は、「太郎君で、野球部なんだね」とか、そんな質問から始まった。

二人は、テニスコートのフェンス越しに語り合つて、それからまた練習に戻つて行つた。そうした会話の形式を、ほとんど毎日、するようになった。

しかし、太郎が野球部の練習についていけなくなり、退部するに至つたことで、その会話の機会は断ち切られることになった。

「どうして、あの時、野球部をやめたの？」

自転車を押しながら、和子が聞いてきた。

「あー。あれはね」

太郎は、和子の顔を見やつてから、地面の下に視線を落とした。

「練習についていけなかつたんだ、俺。それでやめちゃつた」

「そうなんだ」

少し、沈黙があつた。

「でも、練習してる時の太郎君、とても楽しそうにしてたけど」

「そう。楽しかった。けど、途中でこれはもうついていけないな、つて思つて」

「また、何か部活やる気ないの？」

「テニスやろうかな」

「え？ やつてみる？」

「なんちゃって。ジョークジョーク」

二人は大通りの交差点まで差しかかつた。

「太郎君の家つて、確か近いんだつたよね。ここら辺？」

「そう。よく覚えてたね」

「前に話してくれたから」

信号が青に変わり、二人は歩き出す。

「日差しが暑いな」

「使つ？」

「え？」

和子は、ワイシャツの胸ポケットからハンカチを取り出し、それを太郎に見せた。太郎がそれを見て、黙っていると、

「ほら」

和子はハンカチでそつと太郎の額を拭いた。

「ありがとう。本田」

「呼び名ももう変えようよ。私は、太郎君。太郎君は、私のこと、かずっち」

「かずっち？ かずちってなんだよ」

「なんとなく思いついた名前」

「まあ、いいや。かずっちね。よう、かずっち」

「何、太郎君」

「これから、またお茶でも飲みに行きませんか、かずっち」

そう言つと、和子は横断歩道の白い線をじつと見つめながら、くすつと笑い、

「喜んで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1370j/>

告白

2011年10月5日02時45分発行